二〇二二年度

普連土学園中学校　入学試験問題

二〇二二年　二月一日実施

国　語

一日午前四科

一、問題に答える時間は六十分です。

二、問題は、問題一　～　問題五　までであります。

三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。

四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

乱読という言葉があります。手当たり次第に本を読むということです。私は大学二年生の頃に年間二五〇冊くらいの本を読んだとお話ししましたが、それがまさに乱読の時期でした。夏目漱石が好きでしたが、漱石だけを繰り返し読んでいたわけではありません。漱石作品を一通り読み終えたあと、今度は漱石と関わった、さまざまな人たちの本を手に取りました。漱石は、漱石山房という自宅の一部を開放していろいろな人たちと会話をするサロンのような空間を作っていて、木曜日になると毎週そこに多彩な訪問客が集ったと言います。内田百閒や芥川龍之介、寺田寅彦など、漱石山房を訪れた人たちの作品にも触れていくことで、①読書の射程がどんどん広がっていきました。随筆もあれば小説もあり、詩や俳句にも出会って、よくもまあ薄暗い部屋でこれほど闇雲に読んだものだと自分でも不思議に思うほどの乱読の時期でした。

もちろんずっと乱読を続けているわけではありません。延々と乱読を続けることが良いことだとも思いません。ただ、そういう色々な読書の経験を経て、気が付いたことがあります。本が読み手にもたらしてくれるものが三つあると考えています。

一つは、とても単純な話ですが「知識」です。言うまでもないことですが、たくさん読むとたくさんの知識が手に入ります。何かとても短絡的な話に聞こえるかもしれませんが、知識が増えることはとても大事です。知らないより知っているに越したことはありません。とくに今の世の中は、複雑になっていて、知らないとどうにもならないことがたくさんあります。若いうちは、いろいろな本を読んで、いろいろなことを知っていただきたい。知識を得る、ただその一点をもってもたくさんの本を読むということは大事なことなのです。しかしもちろん、②それだけではないわけです。

大事なのは、ここから先の二つです。二つめは「想像力」です。いろいろな本、特に小説を読むと、いろいろな人間が出てきます。人間は短い人生で、限られた世界の中で生きています。しかし本を読むと、自分が経験できなかった別の人生というものを体験できます。私は医者をやって、一七年ぐらいになりますけど、どんなに医者を究めても所詮医者の人生しか分かりません。外来にいると自分の知らない世界からいろいろな人がやって来ます。老若男女を問わず、どこかの裕福な会社の社長さんから、ホームレスのおじいさんまで。そのたびにいかに世の中が広くて、自分の見ている世界が狭いかという

ことを痛感させられるのですが、たくさんの本を読んで、たくさんの人の人生を体験していると、そういう多様な人の気持ちに共感できることが増えてきます。

a ホームレスのお爺さんが真冬の夜に突然救急車で運ばれてくることがあります。ひどい腹痛で運ばれてきて、慌てて検査をしてみたものの今一つ原因は分からない。分からないものの、あまりに痛がっているから帰すわけにもいかず、そのまま入院させることにして、病棟のベッドが確保できた途端「売店に行ってパンを買ってくる」と言って、急に歩き出したりするんです。一瞬何が起こったのか分からないんですが、要するにおじいさんは寒くて寝る場所がなかったから救急車を呼んだんです。最初から病気でもなんでもないわけです。ひどい話だと頭にきます。冗談じゃないと怒鳴りつけたくなります。しかし病棟まで足を運んでいるうちに、何となく苦笑してしまうのは、そういう人の切実な大変さが、少しだけ分かる気がするからです。

……中略……

ホームレスの話はやや極端な例ですが、魚屋さんや、飲み屋のマスターや、何でも良いのですが、自分とは異なる立場にある人たちが、日々どんな生活をしているのかというのは、やはり外から見ているだけでは分かりません。でも、その分からない部分を描いた良い作品に出会うと、そうした人たちの姿が身近なものに感じられてくるようになります。そうすると③だんだん人に対して怒らなくなってくるんです。みんなに事情があるんだという、非常に単純な話なのですが、そういう感性が「想像力」というもので、大事な力だと思うのです。

最近外来をやっていて思うのは、「想像力」がなくなってきている人が多いということです。私が医者になった一五年ぐらい前は、夜中の二時に救急外来に来た患者さんの多くが、「夜中にすいません、先生」とひと声かけてくれました。具合が悪くなったのが、たまたまその時間だっただけなのに、そんな気遣いの言葉を口にしてくれるんです。ところが最近の人は夜中の二時とか三時に来て、「胃薬が欲しい」と言い、一五分待たせたら、④「何で待たせるんだ」と怒り出す人がいるんです。医者は医者で徹夜で働いていますし、他に急患がいれば軽症の人は後に回すのですが、そういうことに対し想像力が働かなくなっていると感じます。これは患者さんだけではなくて、医療者の側もです。多くの人が物語に触れなくなったせいではないかと考えたりもします。

そういう意味で、皆さんには本の中でも特に、いろいろな物語に、小説に触れてほしいと思います。もちろん啓蒙書とか、

実用書と言われる分野の、知識が詰め込まれた本も良いのですが、物語の持つ力は特別です。多くの物語に触れ、いろいろな人の人生を体験して、多様な人に共感できる想像力を身に付けてほしいと願っています。

……中略……

さて、読書の効能の三つめは、「語る」ということです。私は、この要素は「想像力」と同じくらい重要だと考えています。たくさんの優れた文章を読むと、語彙力が増えます。知っている言葉が増えると多彩な事柄が表現できるようになります。表現するということは、単に話したり書いたりするということだけではなく、「考える」ということにつながります。ものを考えるときに言葉はとても大事です。一昔前は、人間は、何か頭の中に考えが浮かんでから、それを言葉に変換して表現している生き物だと言われていました。現代の脳生理学の世界では逆で、先に言葉があってから考えが生まれるということが指摘されています。難しく聞こえるかもしれませんが、言葉にできない思考というものは存在しない、思考の前に言葉があるということです。

私は、臨床現場では*研修医の指導もしています。研修医から時々聞く言葉に「頭では分かっているんだけど、うまく言えない」という返事があります。⑤実はそれは分かっていないということと同義なんです。言えるということ、表現できるということが理解そのもの、つまり言葉が少ない人は思考が貧しくなるともいえます。たくさんの言葉を知っている人は、複雑な思考ができるようになります。本当だろうかと思う人もいるかもしれませんが、このことをそのまま小説にしている作品があります。ジョージ・オーウェルの『一九八四年』というＳＦ作品です。ある独裁国家が舞台で、そこでは国家によって国民が完全に支配されて生活をしています。少しでも反逆を示すような態度を見せるとたちまち捕まって殺されてしまう恐ろしい国で、国中に監視カメラが置かれ、あちこちに国家のスパイが潜りこんでいます。そんな中で、国民をより強力に支配する方法の一つとして、その国の国語辞典に載っている単語を毎年少しずつ減らしていくという方法が示されています。国語の辞書が毎年だんだん薄くなっていくわけです。結果としてどういうことが起こるかというと、国民は自分が勉強をする言葉が減るから楽になったと感じるのですが、同時に少しずつ難しいことを考えることができなくなって、自身の置かれた社会の状況が何かおかしいとは思いつつ、何がおかしいのか表現できなくなっていくんです。表現力を失った人々は、やがて考えることをやめて、従順になっていく。そういうシーンが印象的に描かれています。

とても恐ろしい情景ですが、大切なことを語っていると思います。自分の中の言葉が減ってくると考える能力が落ちるの

です。今この国では、時代とともに学校で習う言葉や漢字の数を減らしていく傾向にあります。これはかなり危険な選択だと思います。もちろん山のように覚えればいいというものではないでしょうけれど、⑥言葉の数は絶対に多い方がいいと私は考えています。

……中略……

「考える」ということについて話をします。ここまで時間をかけて本がもたらしてくれる「知識」「想像力」そして「言葉」というものの大切さをお話ししました。しかしこれで終わりではありません。この三つをしっかり身に付けた上で、一番大切なことは、物事をしっかりと考えるということです。

若い方たちは、これから答えの出ない問題にたくさん出会います。年齢とともに問題は減っていくかというとそうではなく、年を重ねれば重ねるほど、いよいよ難しい問題が増えてきます。私は今、三九歳ですが、毎日、正解のない問題を突き付けられています。子どもの頃にも無論たくさんの問題にぶつかりましたが、答えが見つからなければ、そのまま放置しておくことができました。でも大人になると、そういうわけにはいかなくなるのです。

たとえば医療現場では、うつ病の患者さんにがんが見つかった時に、がんだと告げて良いのかどうかという問題に出会います。病名は患者本人に必ず伝えるのが原則ですが、うつ病の人にがんだと言って自殺をしてしまうことは避けなければいけないわけです。病名を告げるべきか告げないでおくべきか、答えが出せないから一年くらい放置して、また来年考えるというわけにはいきません。また膵がんが見つかった人に、非常に強力でよく効くけれど、その分副作用の強い薬を使うのか。b、効果は弱いけれど、副作用のほとんどない薬を使うべきか。こういう問題も教科書に答えがあるわけではありません。

例えが偏ってしまいましたが、こんな風に大人になると、正解のない問題に答えを出さなければいけなくなるときが来ます。あらかじめ用意された正解を探し出すのではなく、正解のないところに、自分なりの正解を作り上げなければいけないのです。その時に必要なことが「考える」ということなのです。

私は、研修医が難しい患者さんを診る際には、⑦「診断と治療方針を必ず決めてから質問・相談に来なさい」と言うようにしています。これは目の前の問題に対する自分なりの答えを自分で作りなさい、ということです。それをしないと、人間

は成長しないんです。医者で言えば全然医者として成長しないんです。いつまで経っても自分の考えを組み立てることができず、挙句に目の前の安易な情報に飛び付いて自分の意見にしてしまう癖が付いてしまいます。情報は山のように世の中にあふれています。インターネットを開けば、言葉だけは山のように転がっています。けれども「目の前の患者さんの治療方針」はどこにも書かれてはいないんです。自分で考えるしかない。ところが、この「考える力」が、今多くの人で、とても低下していると感じるのです。

……中略……

今、世の中にはおかしな情報がたくさん流れています。新聞やテレビのニュースといった本来なら信頼がおけたはずの情報の中にすら、奇妙な部分が増えてきています。ときには明らかに間違った情報さえ目にします。考える力というのは、目の前に提示された情報の真偽を見抜く力でもあります。何か印象的な情報に接したときに、それを鵜呑みにするのではなく、問題の本質がなんであるかを見抜くための「考える力」です。

先日、東京医科大学で、女性の受験生の点数を無断で引いて、男性を優先的に入学させているといった事件がありました。あんな卑劣な行為は全く許されないことです。あってはいけないことです。しかし報道されている内容は、その原因として、医学部が旧態依然としているから、男尊女卑の価値観から抜け出せていない古い組織だからだと言うだけです。これは的外れな解釈です。私は医療の内側にいる人間なので、そのことをよく知っています。問題はもっと難しいところにあるのです。

c 考える力の低下したマスメディアは、型に嵌った批判を繰り返すばかりですし、受け取る側の人たちもまた同様に、その情報を鵜呑みにして、社会全体が問題の核心からはるか遠いところで浅薄な批判を繰り返しているばかりです。

皆さんは、考えるということを決して忘れないようにしてください。そうした力を育ててくれるものが読書です。⑧答えの出ない問題に向き合っていくとき、本が強い味方になってくれます。

（夏川草介「本はともだち」　『答えは本の中に隠れている』岩波ジュニア新書所収）

〈注〉＊研修医……知識や技能を高めるために学習や実習をする初任者の医師。

問一　文中の［a］～［c］に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　さらに　　イ　もしくは　　ウ　たとえば　　エ　つまり　　オ　しかし

問二　――線部①「読書の射程がどんどん広がっていきました」とありますが、「読書の射程」が広がるとはどのようなことですか。答えなさい。

問三　――線部②「それ」とは、どのようなことですか。答えなさい。

問四　――線部③「だんだん人に対して怒らなくなってくるんです」とありますが、このようになる理由について説明した次の文のA～Cに当てはまる漢字二字の言葉を、それぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

多くの［A］に触れることで、自分とは異なるさまざまな人々の人生を［B］し、多様な人の気持ちに［C］できるようになったから。

問五　――線部④「『何で待たせるんだ』と怒り出す人がいる」とありますが、怒っている人が医者に対して想像すべきことはどのようなことだと筆者は考えていますか。答えなさい。

問六　――線部⑤「実はそれは分かっていないということと同義なんです」とありますが、なぜ「頭では分かっているんだけど、うまく言えない」ということが「分かっていないこと」と同じと言えるのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　言葉で表現できなければ分かったとは言えないので、部分的にしか理解できていないことになるから。

イ　言葉で表現するには考える必要があるので、表現できないのは思考力が不足していることになるから。

ウ　先に言葉があって考えが生まれるので、言葉で表現できないということは理解していないことになるから。

エ　頭の中の考えを言葉にすることに慣れているので、言葉にできないのは考えが整理されていないことになるから。

オ　頭で理解していることは表現できるはずなので、うまく言えないのは表現力が足りていないことになるから。

問七　――線部⑥「言葉の数は絶対に多い方がいいと私は考えています」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問八　――線部⑦「『診断と治療方針を必ず決めてから質問・相談に来なさい』と言うようにしています」とありますが、筆者はなぜ研修医にこのように言うのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　治療方針を自ら考え決めることではじめて、他者のアドバイスに耳を傾（かたむ）けられるようになるから。

イ　あらかじめ治療方針を自ら考えておいた方が、よりよい治療方針を議論するのに好都合であるから。

ウ　世の中にあふれている情報を自分なりに取捨選択することで、考える力を身に付けてほしいから。

エ　治療方針という目の前の問題に自ら向き合うことで、医者として成長してほしいと考えているから。

オ　はじめから正解に近い治療方針を耳にすると、それにとらわれて正しい判断力を失ってしまうから。

問九　――線部⑧「答えの出ない問題に向き合っていくとき、本が強い味方になってくれます」とありますが、なぜそのように言えるのですか。説明しなさい。

問題二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

よく晴れた日曜日、ジンは公園の木かげのベンチに座って、［A］空を見上げていた。

ジンは二十一歳になる青年実業家だ。なかなかハンサムで、背も高く、おまけに頭脳にも恵まれている。大学を飛び級で卒業した今は、父に手取り足取り教えこまれた事業のノウハウを生かし、いくつかの事業を興し、かなりの財産を築いている。世間から嫉妬と憧れのまなざしを向けられる若き成功者というわけだ。

が、ジンにしてみると、人生は灰色だった。おもしろいと思えるものが何もないのだ。

大学は父の望みどおりの学部に入り、望みどおり投資の勉強をした。飛び級できたのは、つまらない授業や勉強を早く終わらせたかったからだ。今やっている仕事も、ただ作業をこなしているという感じだ。ほかにやりたいこともないから、父親に逆らうのも面倒だから、しかたなくやっている。

仕事だけではなく、日々の暮らしも同じようなものだった。適当に食べて、適当に遊んで、人様からばかにされないような服を着て。そこにジンという個性はなかった。

そんなジンに、恋人のニナはついに愛想をつかした。

「悪いけど、もう付き合ってられないわ。別れましょ」

「待ってくれ」

さすがに焦り、ジンはニナにすがった。明るく前向きなニナは、大学時代からの友達でもある。灰色の日々を過ごしているジンにとって、ニナの明るさやはきはきしたところは、唯一の救いだったのに。失いたくなくて、必死で言った。

「ぼくの何が気に入らないんだい？　見た目は悪くないと思うし、お金だってある。世間はぼくを……」

「ああ、やめてよ、ばかなことを言うのは。①そんなこと、どうでもいいのよ」

あわれむようにニナはジンを見た。

「あなたって、いつもつまらなさそうなんだもの。一緒にいると、私まで気分が滅入ってくる。私じゃあなたを幸せにしてあげられないんだって、思い知らされるから。……私からの最後のアドバイスよ。何にふてくされているのか知らないけど、

そんなに気に入らないことがあるなら、徹底的に戦ってみたらどう？」
そう言って、ニナは振り返ることもなく出ていってしまった。
それが一週間前のこと。こうしてニナがいなくなってみて、ジンはわかった。あまり、影響はないなと。
ニナがいてもいなくても、やっぱり毎日はつまらない。ああ、だからニナは出ていってしまったのか。ジンのそばに自分がいる意味がないとわかって……。
ジンは空を見た。青いきれいな初夏の空。だが、ジンの目には灰色に映った。

ジンがベンチに座って目を閉じていると、膝の上に「十年屋」と書かれたカードが舞い落ちてきた。自分宛の預かり品があるので取りに来て欲しいというメッセージに従ってカードを開くと、ジンは霧に満ちた横町にある「十年屋」の前に立っていた。
「十年屋」に入り、魔法使いである店主から聞かされた預かり物は、思いもかけない人からのものであった。

からくり時計のギン。
世の人にそう呼ばれる祖父のことが、ジンは大好きだった。おもしろいし、おしゃべり上手だし。その上、その手は本当に器用で、目がちかちかしてしまうような小さなねじを使い歯車を組み立て、時計という一つの世界を創造していく。その魔法のような工程に魅了された。
祖父が作る時計は、その部品の一つにいたるまで全部手作りで、同じものは一つとしてない。正確に時を教えてくれると同時に、凝った細工で遊び心にあふれている。
ぼくもおじいちゃんのようになりたい。そして、おじいちゃんよりももっとすてきな時計を、いつか作ってみたい。
そう言ったところ、祖父は大変喜んで、道具を一式プレゼントしてくれ、少しずつ技を教えてくれるようになった。
ジンは道具を家に持ちこんで、ひまを見つけては、歯車をいじくるようになった。
②そんなジンを、父親のゼスは苦々しく見ていたようだ。
「おじいちゃんのところへは、あまり行くんじゃない」
そうはっきり言われたこともあった。

「幸い、おまえは私に似て優秀だ。今がんばれば、将来、きちんとした立派な人間になれるだろう。……われわれは高級時計を買う側の人間だ。作る側の人間とは違うのだから」

そういうことを言う時の父は、決まって目が冷たく光っていて、ジンは心底こわかった。それでも言いつけを守ることはせず、ひまを見つけては祖父のもとを訪ねた。父の言っている言葉は理不尽で、ちっとも納得できなかったからだ。

……中略……

そうしてジンは十一歳となった。

ある日、③祖父がいたずらっぽく笑いながら打ち明けてきた。

「今ね、おまえのためにとびきりすてきな時計を作っているんだよ」

「どんなの？　見せて」

「だめだめ。次の誕生日までのお楽しみだよ。これから、おまえの修業は居間で見てあげるから。この仕事部屋は当分立ち入り禁止だよ」

そう言って、祖父は仕事部屋にジンを入れてくれなくなった。

あの祖父が「とびきり」と言うのだから、きっとそれはすばらしい時計に違いない。

見たくて見たくて、ジンは誕生日が待ちきれない思いだった。

そんなある日、めずらしく父が「今日はおじいちゃんの家に行く」と言った。

「あの人にちょっと話があるんだ。おまえは留守番しているか？」

「行く！　一緒に行くよ」

「なら、早く支度をしなさい。今日は緑の上着を着るといいだろう」

「あれはきらいだよ。ちくちくするんだもの」

「だが、仕立てのいいものだ。みっともないものを着るよりもいいだろう。あと、ネクタイも忘れるんじゃないぞ。いいな」

「……」

ここでおこらせたら、連れて行ってもらえなくなるかもしれない。今日は従うことにしよう。

ジンは言われたとおりの服を着た。やっぱり上着はちくちくしたし、ネクタイが息苦しくてしかたない。それでも、祖父の家に行きたい一心で、我慢した。そして、父の車に乗りこんだのだ。

あいにくと、祖父は留守だった。だが、ドアのカギは開いていた。「不用心な」と、父は顔をしかめた。

「まあ、カギが開いているということは、ちょっと近所にでも出かけたんだろう。すぐにもどってくるだろうから、中で待たせてもらうとしよう」

「うん」

父と並んでソファーに座ったが、なんだか落ち着かなかった。そこで、「ちょっとトイレに行ってくる」と言って、居間をぬけ出した。

父の視線の届かぬところに行き、ほっと息をついた時だ。はっとした。祖父の仕事部屋のドアが少しだけ開いていたのだ。チャンスとばかりに、ジンはさっと仕事部屋へとすべりこんだ。

……中略……

「ジン！　何をやっているんだ！」

ドアを開けて、父のゼスが姿を現した。

あまりに突然だったので、ジンはびくっとした。その拍子に、ちょうどつまみをいじっていた指がはずれ、B、時計が落ちていった。

ガンッ。

小さいが、いやな音を立てて、時計が床にぶつかった。

ジンは硬直してしまった。なんてことだ。時計を落としてしまうなんて。

真っ青になる少年の前で、父はゆっくりと時計を拾い上げた。そうして時計を一目見るなり、顔をしかめたのだ。

「こわれている……」

「そ、そんな！　うそ……」

「本当だ。見なさい」

ジンは父の手から時計を受け取った。

本当だった。時計にはめこまれたガラスには細いひびが入っていたし、落ちた衝撃で、幻獣たちの体のあちこちが欠け落ちてしまっている。針も一本、はずれてしまっていた。見事な出来栄えゆえに、繊細なものだったのだろう。

無残なこわれ方に、ジンは息が止まってしまいそうだった。悲しくて、そしてこわくて、おそろしくて。

そんなジンを追いつめるように、父は重々しく言った。

「おまえ、とんでもないことをしたな。おじいちゃんの作品をこわすなんて。……あの人がこれを知ったら、どんなに悲しむか、わかっているのか？」

「……」

「ただ謝っても、きっと許してはくれないだろう。時計はおじいちゃんの宝物、命と言ってもいいものだからな。……おまえの顔など見たくもないと思うはずだ」

うわっと、ジンは泣き出してしまった。自分がしでかしてしまった罪の重さに、耐えきれなかったのだ。

「ど、どうしたら、ひぐ、い、いいの？」

「立派な人間になりなさい、ジン」

がしりと、父はジンの両肩をつかんできた。④その目は奇妙にぎらついていて、口元には薄く笑いさえ浮かんでいた。

「おじいちゃんがほこりに思ってくれるような、立派な人間になるんだ。そうすれば、おじいちゃんもいつか許してくれるだろう。大丈夫だ。私が導いてやる。私の言うとおりにすればいいから」

私はおまえの味方だよと言われ、ジンは泣きながら父にしがみついた。

父はジンを部屋から連れ出し、祖父に会うことなく家にもどった。

その日から、ジンはなんでも父の言うとおりにするようにした。勉強をしっかりして、父がすすめる服を着て、すすめられた本を読んで。とてもつらかったが、これは罰だと思って、受け入れた。それに、いい子になれば、また祖父に会えるはず。それを心の支えにして、がんばった。

というのも、あれ以来、祖父からの連絡がぴたりと途絶えてしまったからだ。手紙も電話も来ない。もちろん、家にも遊びに来てくれない。かと言って、ジンのほうから祖父のところへ行くことはできなかった。そんな勇気はなかったし、「何しに来た！」と怒鳴られるのがこわかったのだ。

それでもときどき、父に聞いてみた。
「おじいちゃんからなんか知らせはあった？」
おそるおそる聞くジンに、父はいつも憂鬱そうにうなずいた。
「ああ。……残念ながら、まだおまえのことをすごくおこっているようだ。あの人はがんこだからね。もう少し時間を空けたほうがいいだろう」
そう言われるたびに、心臓をつかまれるような気がした。
そうこうするうちに、ジンは十二歳の誕生日を迎えた。その日を、ジンは待ちわびていた。心の中で、少し期待していたのだ。
もしかしたら、今日はおじいちゃんが来てくれるかもしれない。じゃなければ、プレゼントを送ってきてくれるかもしれない。もうおこってないよという意味をこめて。何か少しでもそういうしるしをもらえれば、ぼくは一目散におじいちゃんのところに行って、謝ることができるんだ。だから、しるしがほしい。どうかどうか、おじいちゃん、ぼくを許すって言って。
祈りながら一日待ったが、祖父は来てくれなかった。プレゼントも届かなかった。
まだ許してはもらえないのだ。
絶望のあまり、ジンはその夜、ひたすらベッドで泣いた。
結局、再会することなく、祖父は亡くなってしまった。ジンの誕生日からほぼ半年後のことだ。
父からそれを知らされた時から、ジンは自分で考えるのをやめた。父の言いなりになって生きるほうがいいと、わかったのだ。
父に従っていれば、何かを疑ったりこわくなったりすることもない。感覚がマヒしていくように、何も感じなくなるのは楽でいい。祖父からもらった時計作りの道具にも二度と触らなかった。祖父を思い出すのがいやで、存在そのものを忘れたかったから。
そうして、思い出はすべて心の奥底に封印され、父の思いどおりに動く、父の分身ジンが出来上がったのだ。

あふれた記憶はあまりにも多く、混乱のあまり頭痛までしてきた。
「うっ……ううう……」
うめきながら顔をおおうジンに、魔法使いはやさしくささやいた。
「じつは、伝言も預かっているのです」
「で、伝言って、祖父からですか？」
「はい。どうぞお聞きください」
そう言って、魔法使いが取りだしたのは、大きな巻貝だった。真珠色に淡く光っていて、しっかりとコルクのふたがはめこまれている。魔法使いがそのコルクを引きぬくと、貝から深みのある温かい声が流れ出てきた。
「かわいい孫のジン。元気にしているかい？」
どっと、ジンの目から涙があふれた。
覚えている。この声は祖父のものだ。間違いない。
まるですぐ目の前に祖父がいるような気がして、涙が止まらなくなってしまった。その間も、貝殻に封じられたギンの言葉はよどみなく流れつづけた。
「ジン。急にうちに来なくなったのは、やっぱり、あの時計のせいかい？　そのことなら、私はまったくおこりもがっかりもしてないよ。形あるものはいずれはこわれる。だから、大切に使う意味があるんだ。そう伝えるために、何度も手紙を送ったし、会いにも行ったんだよ。でも、手紙は届かなかったようだね。私のほうも、いつも『あの子は会いたくないそうです』と、追い返されてしまったんだ。そうこうするうちに、私に病気が見つかってしまってね。だから、形見としてこの時計をこわれたまま、おまえに残すと決めた。⑤これを私が直してしまうのは簡単だが、それではおまえのためにならないと思ってね。でも、このまま残しておけば、おまえのお父さんは私が死んだあと、おまえにわたすことなく処分してしまうだろう。だから、十年屋さんにたのんで、預かってもらうことにした。受取人をおまえに指定してね。
ああ、ジン。おまえは今、二十一歳なんだろう。どんな大人になっているか、私は少し心配している。というのも、おまえのそばにはお父さんがいるからだ。おまえのお父さんは頭が良くて金もうけにはすぐれている人かもしれないが、心は貧しい。おまえが染まっていないか、心配でならない。どうか、ジン、心を失わないでくれ。時計職人になると笑顔で言って

くれた少年の心を忘れないでくれ。私からの切なるたのみだ。時計職人にならなくたっていい。ただ、おまえが実りある人生を過ごせることを願っている」

メッセージはそこで終わった。

静寂が広がる中、ジンは石像のようにかたまっていた。もはや涙も止まっていた。

しばらくしてから、ジンはのろのろと魔法使いを見た。

「おじいちゃんは……ぼくを、許してた？」

「そのあたりの事情は存じませんが、あなたにとても会いたがっておられたのは本当ですよ。あの子のことが心配だとしきりにおっしゃっておられたので、この貝にメッセージを吹きこむことをおすすめしたのです」

「……」

「ともかく、お預かりしていたものはこれで全部です。さて、どうなさいます？　このこわれた時計を持ち帰られますか？　それとも、受け取りを拒否なさいますか？　どちらでも、お好きなほうをお選びください」

「……」

ジンは長い間、＊懐中時計を見つめていた。頭の中ではさまざまな思いや考えが、火山のマグマのように噴き上がってきていた。

おじいちゃんはぼくに会いたがっていた？　ぼくを許していた？　なのに、なぜ？　……ああ、そうか。父さんだ。父さんが全部やったんだ。ぼくを操り、おじいちゃんから遠ざけた。父さんのせいだったんだ。

そう思うと、そのきっかけになった⑥この時計が憎いような気もする。でも、これは祖父が自分のために作ってくれたものでもあるのだ。こわれたままで残したのにも、ちゃんと意味がある。

ジンは夢から覚めたような気持ちで、ぎゅっと懐中時計を握りしめ、自分の胸に押し当てた。

こうして懐中時計はジンのものとなった。だが、これで終わりではないと、ジンはふたたび魔法使いを見た。

「同じ品物をもう一度預けることって、できるんですか？」

「はい、できますよ。その場合は、新たにお客様の時間を一年分、払っていただくことになるのですが」

「時間？」

ふわっと、魔法使いが微笑んだ。

「ここは十年屋、十年間の保管に対して一年の寿命をいただく店ですので。ギン様も、残りの寿命をすべてお支払いになって、この時計をこちらに預けられたのですよ」

そうまでして、祖父は自分の想いをジンにわたしたかったということだ。その想いに応えなくてはという気持ちがますます高まった。

「では、ぼくから寿命を取ってください」

「この時計を、また十年預けると？」

「はい。今のぼくでは、この時計を直せないので。……十年の間に、その時計を修理できるほどの時計職人になってみせます」

決意をたたえた青年の目を、魔法使いはじっと見つめ返した。それから、にこっと笑ったのだ。

「もしかしたら、⑦もっと早く迎えに来られるかもしれませんね。ギン様は、あなたは自慢の孫だとおっしゃっておいでした。時計作りの才能もあるようだと。……では、改めてのお預かりと言うことで、契約をいたしましょう」

その後、契約書にサインをしたジンは、ふたたび元いた公園へと舞いもどった。

C、ジンは息をついた。さて、これからいそがしくなる。時計職人になるための修業先を見つけなければ。祖父の仕事仲間のつてを当たれば、それはなんとかなるだろう。だが、その前に今やっている事業をしかるべき形で終わらせ、身の周りもきれいにしなくては。

いちばん厄介なのは、父だ。時計職人になると言ったら、父のことだ、烈火のごとく怒り狂うだろう。正直、あの人に逆らうことを考えただけで、身がすくむ思いがする。長年、父にしめつけられていた心や人格は、そう簡単には変えられないものだ。

だが、今のジンには祖父の残してくれた言葉がある。あの一言一言が、父に抵抗するジンを守ってくれるだろう。そしてなにより、時計を直したいという目標ができたのだ。何かをやりたいと思うのはひさしぶりだ。

大きく息を吸いこみながら、ジンは空を見た。きれいな青い空だ。ちゃんときれいだと思えるのは、何年ぶりだろう。

ふと思った。⑧自分に起こった出来事と変化を、ニナに話したいと。

この時間なら、たぶん、大学の研究室にいるはずだ。ニナに今すぐ会わなくては。
ジンは大急ぎで大学に向かって歩き出した。

（廣嶋（ひろしま）　玲子（れいこ）『十年屋　時の魔法はいかがでしょう？』　静山社）

〈注〉＊懐中時計‐‐‐‐‐スーツやズボンのポケットなどに入れて持ち歩く、小型の時計。

問一　文中の［A］～［C］に入る最も適当な語を次のア～クからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　きりっと　　イ　だらだらと　　ウ　ふうっと　　エ　きちんと　　オ　こそっと
カ　さっと　　キ　ぼんやりと　　ク　するっと

問二　――線部①「そんなこと」とありますが、ニナの言う「そんなこと」とは、ジンのどのようなことですか。答えなさい。

問三　――線部②「そんなジンを、父親のゼスは苦々しく見ていた」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問四　――線部③「祖父がいたずらっぽく笑いながら打ち明けてきた」とありますが、祖父がジンにこのように告げたのはどのような思いからであると考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　とてもまねできないようなとびきりすてきな時計を作ることで、ジンに時計作りを諦（あきら）めさせたいと思っている。
イ　ジンがあこがれを抱（いだ）きそうなとびきりすてきな時計を作り、時計職人になろうとするジンを励（はげ）ましたいと思っている。
ウ　ジンの期待を上回るほどのとびきりすてきな時計を作り、自分への尊敬の念をより大きなものにさせたいと思っている。
エ　とびきりすてきな時計を作ることを告げて期待させ、その期待に違（たが）わぬ時計を作ってジンを喜ばせたいと思っている。
オ　愛する孫であるジンのためにとびきりすてきな時計を作って、十二歳の誕生日にジンを驚（おどろ）かせたいと思っている。

問五　――線部④「その目は奇妙にぎらついていて、口元には薄く笑いさえ浮かんでいた」とありますが、この時の父の思いはどのようなものであったと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　不意に声をかけたせいでこわれた時計を、ジンは自分のせいだと思っていると知り、助かったと思っている。

イ　この失敗を機に、ジンの祖父との関わりを絶ち、ジンを自分の望む通りの人間に育て上げようと思っている。

ウ　取り返しのつかない失敗をしたジンを、自分の導きで祖父に許される立派な人間にしてやろうと思っている。

エ　こわした時計を見て泣くジンが、これで自分は時計を作る側の人間ではないと気付けただろうと思っている。

オ　なかなか自分に従わなかったジンが、時計をこわしたことで自分を頼(たよ)ってくれることを嬉(うれ)しいと思っている。

問六　――線部⑤「これを私が直してしまうのは簡単だが、それではおまえのためにならないと思ってね」とありますが、ギンは、「こわれたまま」の時計を直さずに渡(わた)すことがどのようにジンのためになると考えたのですか。答えなさい。

問七　――線部⑥「この時計が憎いような気もする」とありますが、なぜ「憎い」のですか。説明しなさい。

問八　――線部⑦「もっと早く迎えに来られるかもしれませんね」とありますが、魔法使いがこのように言ったのはなぜですか。答えなさい。

問九　――線部⑧「自分に起こった出来事と変化を、ニナに話したい」とありますが、なぜ「ニナに話したい」のですか。説明しなさい。

問題三

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

① 昼休みの教室のあまりの騒がしさにヘイコウした。
② 二十世紀になると、技術のカクシンが飛躍的に進んだ。
③ チーム内でのもめ事を公正にサバく。
④ はじめて訪れた森林公園の中を自由にサンサクした。
⑤ 最後の試合に勝ち、ユウシュウの美を飾ることができた。
⑥ 高速道路でのスピードの出し過ぎは禁物だ。
⑦ 世の中の風潮に安易に流されてはいけない。
⑧ 決められた時間に参加者全員を点呼する。
⑨ 誰からの指図も受けずに自力で問題を解決した。
⑩ 泳いでいる魚を素手で捕まえるのは不可能だ。

問題四　次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字に直し、その漢字の意味にあたるものを後のア～ソから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 地震の時はまず身の安全をハカるべきだ。
② 彼は突然顔色をカえて怒りだした。
③ 富士山のノボり口は一つではない。
④ 注文の品物を期日通りにオサめる。
⑤ 彼女は喜びを顔にアラワした。

ア　あることが実現するように企てる。
イ　時間や数などを数える。考える。
ウ　重さ、容積を調べる。
エ　前と異なる状態になる。
オ　ある役割を別のものにさせる。
カ　物と物を交換する。
キ　公の場にでる。
ク　高いところに進む。
ケ　太陽や月が高いところへ移る。
コ　手に入れる。よい結果を得る。
サ　きちんと入れるべき所に入れる。
シ　人格や行いを立派にする。
ス　本などを書いて世に出す。
セ　思いが外に出る。
ソ　隠れていたものが見えるようになる。

問題五 次の①～⑩の文章の□にあてはまる慣用句を後のア～シから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 彼の忠告は、正論なだけに□。
② 上京して十五年たって、やっと故郷に□ことができた。
③ 妹がスピーチコンテストで優勝したので、私も□。
④ 弟のいたずらのあまりの激しさに□。
⑤ 次から次へと仕事に追われて、毎日□。
⑥ 誰もが嫌がる役割を□。
⑦ 私には□ような覚えがない。
⑧ 作家が、作品の完成に□。
⑨ 彼女は本当は気が強いのに、人前では□。
⑩ 久しぶりに友人と会うと、つい会話に□。

ア 手を打つ　イ 手を焼く　ウ 鼻が高い　エ 錦を飾る　オ 花が咲く
カ 買って出る　キ 見栄をはる　ク 心血を注ぐ　ケ 耳が痛い　コ 目が回る
サ 猫をかぶる　シ うらみを買う

（以下余白）